

# 登録医紹介

当院と連携いただいている登録医療機関をご紹介します。

## 桃田小児科医院

診療科：小児科  
 駐車場台数：28台

所在地：加古郡稲美町中一色字青の井 822-2

TEL.079-497-0700

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
午前 8:30~11:30	○	○	○	○	○	○	-
午後 3:30~6:00	○	○	○	-	○	-	-



院長：桃田 哲也 先生



### 桃田先生から

子どもを育てるのは親だけではなく、社会や地域も子どもたちを育てなければなりません。当院は「Each child is a treasure of our society」子どもは社会の宝を理念として、病気を持つ子どもたちだけでなく、その親御さんたちにも安心感を与える癒しの空間となる医院を目指しています。

従来から小児科外来の診療の多くが感染症治療であることに変わりはありませんが、定期接種の予防接種が増えてワクチン接種にウェイトがかかり、以前とは様相が少し変わってまいりました。迅速診断キットの進歩で、感染症の診断もしやすくなりました。

また画一的になりやすい西洋医学を補うために東洋医学(漢方薬)も使って、治療のパリエーションを増やしたりもしています。

約20年の病院勤務を経て15年前に開業しましたが、未だに初めて出遭う症例が沢山あり、病診連携、診診連携を頼りにしています。今後ともご指導の程、宜しくお願い致します。

## かたしま・きたうら産婦人科医院

診療科：産婦人科/婦人科  
 駐車場台数：40台

所在地：高砂市米田町米田 139-2

TEL.079-433-2525

診療時間	月	火	水	木	金	土	日
午前 9:00~12:00	○	○	○	○	○	○*	-
午後 3:30~6:00	○	○	○	-	-	-	-

\*土曜日の診療時間は、午前 9:00 ~ 午後 2:00



院長：片嶋 純雄 先生



院長：北浦 豊 先生



### 院長から

JR宝殿駅から南に徒歩で数分の場所にある当院は、長年地域の母子医療をはじめ女性のwell beingに力を注いできております。その中高砂の地ではありますが地理的にも恵まれ、加古川市民病院の産婦人科ならびにNICUには大変お世話になってきました。

加古川中央市民病院では新しく周産母子センターが開設され、従来以上に充実した医療体制が構築されています。心強いかぎりです。

これからも患者様にやさしく気配りのできる医療の提供を心がけていきたいと思っております。より密接な地域連携がその実現の一助になると思います。今後ともよろしくお願い致します。

地方独立行政法人 加古川市民病院機構  
**加古川中央市民病院**

### 患者支援センター地域連携室

予約専用 TEL(079)451-8651 FAX(079)451-8653  
 その他 TEL(079)451-8652 FAX(079)451-8654  
[http://www.kakohp.jp/medical\\_person/](http://www.kakohp.jp/medical_person/)



加古川中央市民病院 地域連携情報誌

Vol.3

2017年1月

# きらり

[加古川市民病院機構 理念]

いのちの誕生から生涯にわたって地域住民の健康を支え、頼られる病院であり続けま



### CONTENTS

- 巻頭言 大西理事長あいさつ.....2
- 診療科紹介 / NEW TECHNOLOGY.....3
- 特集 地域の小児・周産期医療に貢献する.....4-5
- こどもセンター・周産母子センターの各診療科から.....6-7
- 登録医紹介.....8

# 2017年を迎えて



加古川市民病院機構 理事長 おおにし よし お  
加古川中央市民病院 院長 **大西 祥男**

明けましておめでとうございます。

地域医療機関の皆様には、昨年7月の加古川中央市民病院の開院に際しては、患者様の受け入れ制限、救急制限などご迷惑をおかけしましたが、皆様のおかげで無事に移転、開院できましたことを改めてお礼申し上げます。

加古川中央市民病院は、開院日に第一号の赤ちゃんが誕生し、めでたく幸先のいいスタートを切ることが出来ました。開院当初は来院者の集中などによる混乱もありましたが、6カ月が経ち病院の診療機能は安定してまいりました。外来、病棟、救急、手術、検査他すべての部門において病院は活気に満ちており、新規導入した内視鏡下手術支援ロボット手術(ダ・ヴィンチ)、マグネティックナビゲーションシステム(Niobe ES)も順調に稼働しています。救急搬送件数も増加し、ヘリコプター搬送受け入れやドクターカーの運用も開始いたしました。昨年開設した総合内科、腎臓内科、神経内科へも多くのご紹介を戴き、呼吸器外科の手術症例も増加してまいりました。一方で、東西各病院での運用フローを新病院へ向けて統一化してきたとはいえ、いざスタートすると細部での調整が必要で、より質の高い医療を提供するべく業務の評価・改善に全職員で取り組んでいるところです。

地域の医療機関の皆様のご理解とご支援をいただき東播磨医療圏域の基幹病院として急性期総合病院「加古川中央市民病院」が開院しました。生命の誕生から青年期、壮年期、そして老年期に至る生涯に亘って市民の健康を支えていくことが我々の病院の特徴であり使命でもあると認識しています。団塊の世代が75歳を迎える2025年に向けて地域医療構想が策定され、地域包括ケアシステムが議論される今、地域の医療機関や介護施設等との連携を強化し加古川中央市民病院が在るから安心して暮らせると言っていただける様に、職員一同、より一層努力して参りますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。



# 診療科紹介

## 整形外科



診療部 副部長 兼  
整形外科 主任科部長  
にしやま たかゆき  
**西山 隆之**

整形外科は、加古川中央市民病院開院に伴い、スタッフ6名と整形外科専攻後期研修医1名の計7名で東播磨地域の基幹病院として整形外科診療を行っています。

外傷疾患や関節疾患を中心に、整形外科疾患一般を幅広く、積極的に対応するように心がけています。

まず、外傷疾患に関しては、当院救急科とも綿密に連携しながら、骨折、脱臼、靭帯損傷等の様々な外傷疾患を、積極的に受け入れて治療を行っています。

また、当科では関節疾患に特に力を入れており、「関節センター」を開設して、人工関節手術、骨切り術等の関節温存手術、関節鏡手術などを行っています。特筆すべき事として、人工関節手術においては関節ナビゲーションシステムを導入しています。この導入により、これまで以上に安全で確実な手術治療を行う事ができるようになっています。一方、人工関節手術が適応にならない若年者に対しては、骨切り術や関節鏡手術などの関節温存手術を積極的に行っています。このように、個々の患者さんにとってより良い関節疾患治療を、患者さんと相談しながら行うように心がけています。

高齢化社会の到来に伴い、循環器、呼吸器、消化器などの重大な合併症がある方、癌などの悪性疾患を治療中の方、認知症のある方などの整形外科疾患の治療の機会も非常に多くなっています。当科では、他科の医師や看護師、理学、作業、言語療法士などの医療スタッフと総合的に連携してのチーム医療を行える体制が整っており、このような点が当院の強みであると考えています。

現在当科では、毎日外来診療を行っておりますが、手術日である火、木曜日のみ、初診の方のみに限定させていただいております。その他、関節センターの初診外来を月曜の午前に設けましたので、地域連携室を通じてご予約いただければ幸いです。

今後とも外傷疾患、関節疾患を中心に、地域の医療機関の皆様のお役に立てるように精進して参ります。宜しくお願いいたします。

## NEW TECHNOLOGY

### 関節ナビゲーションシステム

当院整形外科では、関節疾患の治療に力を入れています。その中でも大きな柱になっているのが、人工関節置換術です。人工関節置換術は、傷んだ関節を人工の関節に置き換えることにより患者さんの痛みをとることのできる非常に有用な手術です。この手術では、術前の計画通りに正確に人工関節を設置する事が非常に重要であり、この事が手術後の関節の機能や耐久性などに大きな影響を与えます。

今回、新病院の開院に伴い、関節ナビゲーションシステムを導入しました。このシステムを用いることによって、手術前にはCT画像などを使って最適なサイズの人工関節を最適な位置に置換した場合のシミュレーションができ、綿密な術前計画が可能となります。また、手術中は、術前のシミュレーション通りに人工関節が設置できるようにコンピュータがナビゲートすることにより、安全で正確な手術を行う事ができます。

さらに、このシステムは、人工関節手術のみではなく、若い人に行われる骨切り術などの関節温存手術でも使用可能です。当科はこういった関節温存手術にも力を入れておりますが、このシステムを使用することでこれらの手術も安全に、しかも低侵襲で行えるようになってきています。

このように最先端の医療技術を導入することにより、さらに安全で確実な関節疾患の治療を提供していきたいと思っています。

膝関節や股関節などの関節の痛みでお困りの患者さんがおられましたら、是非ご紹介いただければ幸いです。



赤外線を利用しカーナビの様に手術をナビゲートします。



人工関節を入れ替える骨の部位を正確に切り取ります。



# 地域の小児・周産期医療に貢献する

## こどもセンターのご紹介

こどもセンターの病棟は、周産母子センターと共に当院の5階に位置しています。このフロアはまさに「いのちの誕生から成人に至るまで」の育成段階のこどもたちに医療を提供する場となっています。こどもセンターの病床数は56床ですが、小児科のみならず、小児外科、形成外科、眼科、耳鼻咽喉科、整形外科、歯科口腔外科など小児に関わるさまざまな診療科が、それぞれ成長段階に応じた多様な医療をこどもたちに提供しています。東播磨地域の中核小児医療施設として、高度な小児専門医療や二次救急医療にも日々積極的に取り組んでいます。

昨年には小児循環器を専門とする医師が新たに2名着任し、小児の循環器疾患(先天性心疾患、不整脈、心筋症など)の診療の充実をはかりました。また、心臓血管外科医も新たに着任してこどもの心臓手術にも対応できるようになりました。口唇口蓋裂などの先天奇形の治療は、形成外科をはじめとする複数の診療科(歯科口腔外科、耳鼻咽喉科、小児科など)が他職種(助産師、看護師、臨床心理士、言語聴覚士など)とも連携したチーム体制を作って診療や患者支援を行っています。こどもセンターには臨床心理士や保育士が在駐し、プレイルームや院内学級も併設して、入院中や外来でのこどもたちのこころのケアや日々の生活や学習の支援などを行っています。小児在宅医療支援センターを併設しており、在宅で医療的ケアを受けているこどもたちとご家族への支援も行っていきたいと考えています。

また、当院は日本小児科学会、日本小児神経学会、日本小児外科学会、日本周産期・新生児医学会認定の専門医研修施設として認定を受けており、次代を担う小児医療従事者を育成することも大切な使命であると考えています。

地域の医療機関の皆さまはもとより、教育、福祉、行政機関とも十分な連携を図りながら、未来あるこどもたちの健やかな成長を支えていきます。



院長補佐 兼 こどもセンター長 兼 小児科 主任科部長  
よね たに まさ ひこ  
**米谷 昌彦**



小児科・小児外科外来 プレイコーナー



移行期医療



小児在宅医療支援



## 周産母子センターのご紹介

周産母子センターは、周産期(出産前後の時期)に係わる高度な医療を対象とし、産科と新生児科の両方が組み合わせられた施設です。

通常受診している妊婦さんだけでなく、地域の産婦人科の先生方から、新生児集中治療室(NICU)での管理が必要な児の出産が切迫していると判断された場合や母体に危険があると判断された場合に、速やかに妊婦を受け入れます。また、新生児科医が直接ドクターカーで出向き、出産後の新生児を受容することもあります。

当センターでは、24時間体制でハイリスク妊産婦、新生児の医療に対応しています。

加古川(西)市民病院の時代から地域周産期母子医療センターとして活動していましたが、このたびの新病院への移転により、NICU15床(旧病院と同数)・GCU30床(増加)・産科病棟54床と拡充され、救急外来や手術室との導線も整備されて、より緊急事態に対応しやすくなりました。

以前は、「出産は病気じゃないから無事に生まれて当たり前」という風潮もありました。が最近では、高齢出産の増加・不妊治療の進歩(多胎妊娠の増加)・食生活などライフスタイルの変化により、高血圧など循環器疾患・糖尿病など内分泌疾患・精神疾患・子宮筋腫などの器質疾患を合併する、ハイリスクな妊娠が増加する傾向にあります。それに伴って、初回出産が帝王切開となる妊婦も増加し、その方たちの次の分娩において、前置胎盤などのトラブルを招くことがあります。

このような事態に、産科と新生児科だけで対応できるわけがありません。今回の病院統合で、関連診療科(循環器内科、内分泌内科、神経内科など)が充実されたことは、我々にとっても非常に安心感になっています。

緊急帝王切開においても、24時間体制で麻酔科医をはじめ手術室スタッフともスムーズな連携がとれております。母体到着後30分以内の児娩出を目指す超緊急帝王切開にも、シュミレーションを重ね安全に実施できるようになりました。

産後の出血量が500ml(帝王切開では1000ml)を超えるような過多出血に対し、子宮動脈塞栓術(UAE)は有効な治療法です。旧病院より実施していましたが、これも放射線科の充実により、よりスムーズに行えるようになりました。

一方、我々はハイリスクの妊婦さんばかりを診ているわけではありません。ローリスクの妊婦さんに対しては、産科医とも相談の上、助産師主導の助産師外来を開設し、医療介入の少ない分娩を目指しています。またユニセフ認定の「赤ちゃんにやさしい病院:BFH」の活動も継続中であります。

今後も、産科と新生児科がしっかり連携し、必要に応じて関連診療科の協力を得るという総合病院の強みを生かした医療を提供していきたいと思っております。



赤ちゃんにやさしい病院



新生児専用ドクターカー(カンガルー号)



GCUでの沐浴



周産母子センター長 兼 産婦人科 科部長  
おた たけひと  
**太田 岳人**

# こどもセンター・周産母子センターの各診療科から

## <こどもセンター>

### 小児科 <一般小児>

こどもセンター 副センター長 兼  
小児科 医長

にしやま あつし  
**西山 敦史**



小児科・小児外科外来



こどもセンター病棟

当科は昨年1年間の外来患者数33,397人、入院患者数2,499人の加古川西市民病院小児科と同じく外来患者数15,821人、入院患者数1,136人の加古川東市民病院小児科が一つとなり、東播磨地域における基幹施設として専門的かつ高度な小児医療に取り組んでいます。外来におきましては午前中は急性疾患や病診連携を通じてご紹介いただきました患者さんを、午後には神経、発達行動、腎臓、アレルギー、循環器、内分泌代謝、在宅医療、新生児センター退院後のフォローアップの各専門外来において専門的医療を要する患者さんの診察を行っております。入院におきましては本年7月の加古川中央市民病院開院よりICUでの集中治療を要する患者さんがすでに20人以上に達しており、人工呼吸管理など高度医療を提供しています。入院の多くを占める気管支炎・肺炎、気管支喘息、胃腸炎、尿路感染症などはクリニカルパスを導入し、どの医師が主治医となっても診療の質が保たれるような体制をとるようにしています。また急性疾患のみならず終夜脳波、腎生検、食物アレルギーでの経口負荷試験、成長ホルモン負荷試験などの検査も入院で行っており、小児循環器診療の充実とともに、今後は心臓カテーテル検査入院も始まる予定です。救急医療におきましては365日、二次救急病院を担い、時間外のご紹介や月120-130台の救急搬送を受け入れ、東播磨地域の小児救急の砦として日々診療しております。

東播磨地域の小児医療を地域の先生方とともに支えていくために、今後ともご紹介、ご紹介につきましてはよろしくお願ひ申し上げます。

## <周産母子センター>

### 産婦人科

周産母子センター 副センター長 兼  
産婦人科 科部長

やまだ たかし  
**山田 隆**



産婦人科は現在、常勤医7名(1名は週3回勤務)体制で行っています。毎日の当直1名と緊急呼び出しの待機1名を6名の常勤医で対応しています。当院全体では、加古川西市民病院、東市民病院の合併に備えて昨年度からほとんどの科で医師数は増えていますが、当科においては2014年の11名(非常勤1名含む)をピークに産婦人科医が年々減少しています。そのため新病院開院と同時に稼働する予定であった母体胎児集中治療室(MFICU)は未だオープンできない状態が続いています。

2016年10月からは常勤医の減少に伴い夜間・休日の婦人科救急(卵巣捻転転などの)の受け入れもお断りしている状態で、近隣の先生方にはご迷惑をおかけしております。

近年、全国的に出産の平均年齢が高くなっており、35歳を超えてから妊娠される高齢妊娠(高年妊娠)の割合が増えています。不妊治療によって40歳以上で双胎妊娠の方もおられます。高齢妊娠は様々な合併症を生じやすく、妊娠高血圧症候群(重症化すると子癇発作、肝・腎機能障害、DICなどを発症します)や児の染色体異常、分娩中の緊急帝王切開などの頻度が増えます。当院産科は高齢妊娠、双胎妊娠、前置胎盤や30週未満の早産などの割合が高く、緊急帝王切開も非常に多いのですが、状況によっては超緊急帝王切開術を小児科医、麻酔科医や手術室のスタッフの協力によって行っております。「超緊急帝王切開術とは、方針決定後、他の要件を一切考慮することなく、直ちに手術を開始し、一刻も早い児の娩出をはかる帝王切開術」と一般的に定義され、当院では帝王切開決定より児の娩出まで30分以内を目標としています。リスクの高い妊婦さんが増え、ここ数年で超緊急帝王切開術の頻度も多くなっています。超緊急帝王切開は関わるスタッフ全員が非常に緊張を強いられませんが、各部署と連携して少しでも児の予後改善に努めたいと思っております。



産科病棟 デイルーム



産科病棟 個室

## 小児外科

こどもセンター 副センター長 兼  
小児外科 主任科部長

やすぶく まさお  
**安福 正男**



東播磨地域のの中核病院として新生児医療・小児医療・小児救急医療に取り組んできた小児科医師の協力のもとに、小児外科は小児の外科的な病気の診療にあたっています。

小児外科は2000年から加古川市民病院で診療を開始し、当初常勤医は1名でしたが、2006年から1名増えて2名となり2010年には日本小児外科学会認定施設として認められ(ほかに県内には兵庫県立こども病院外科、兵庫医科大学小児外科の2施設あり)、小児外科の専門医を目指す若手医師の研修も可能となりました。同年9月からさらに1名増えて3人体制となりました。

新生児外科は2009年—2015年には80人の新生児に新生児期に手術を行いました。小児科ではこれまでは治療を控えることの多かった重度の染色体異常を持つ赤ちゃんへの治療も積極的に行われていることから、彼らの外科手術、例えば食道閉鎖、腹壁破裂、横隔膜ヘルニアなどに対しても積極的に根治手術を行うようになりました。これは10年前と大きく異なる点と思われる。

小児センターでは乳児期以後から15歳までの小児の手術を行っていますが、最近では成人と同じように低侵襲手術としての内視鏡外科手術が普及しており、当院でも行うようになりました。以下に頻度の多い順に列記しています。

- ①**鼠径ヘルニア** 2011年から女児を対象として腹腔鏡下のヘルニア手術を行ってきました。美容的な利点以外に、反対側のヘルニアの有無が分かり、同時に行える点があげられます。内視鏡手術といっても、従来の方法と比べて剥離操作が必要でなく、ヘルニア門を糸でくくるのみといういたってシンプルな手術です。
  - ②**虫垂炎** 2009年から開始しました。腹壁に3か所0.5-1.5cmほどの穴をあけて行います。穿孔性虫垂炎に対しても行っていますが、虫垂を取り出したあと、腹腔内を十分に洗浄することで遺残膿瘍がなくなり、創感染が従来の手術に比べて、極めて少なく、感染しても治りやすいという利点があります。最近の100人ぐらいはお済の切開創のみを利用した内視鏡手術を行っており、臍の中に傷痕がかかれて目立たなくなっています。
  - ③**漏斗胸** 2000年開設時から行っており、内視鏡手術を利用して、安全にバーを胸骨の下に通すことができるようになりました。前胸部に大きな傷跡をつくらないうで済みます。
  - ④**停留精巣** 2000年開設時から行っており、腹腔内に残った精巣の精巣固定手術と精巣が消失している場合に腹腔内に残っていないかの観察に用いています。開腹手術が回避できます。
  - ⑤**胃食道逆流症** 2009年から逆流防止手術(噴門機能再建術)を内視鏡手術で行うようになり、術後の癒着性腸閉塞が起こらなくなり、手術後の経過は良好となりました。
  - ⑥**ヒルシュスプリング病** 2010年から内視鏡手術を行うようになり、新生児期から乳児期早期に根治手術を行えるようになりました。人工肛門を置いて待つことが、かなり減ってきました。
  - ⑦**その他** メックル憩室、胆のう捻転、鎖肛、腹腔内・胸腔内の観察などにも利用しています。
- 小児年齢をこえてもすぐに成人診療科には移れない場合もあり、移行期の医療にも積極的に参加しています。通常の診療以外に、重症心身障害者のQOLをよくなる手術など最年長42歳の人にまで行ってきました。
- 地域の小児医療の先生方のニーズにもこたえられるように取り組んでいきたいと考えています。



小児外科手術

## 小児科 <新生児>

周産母子センター 副センター長 兼  
小児科 科部長

もりさわ たけし  
**森沢 猛**



NICU



GCU

NICU15床、GCU30床を有する周産期母子センター新生児部門は、地域周産期母子医療センターに指定され、人口100万人を有する北播磨および東播磨地区における新生児医療の中核病院として機能しています。

新病院では、ほぼあらゆる疾患の赤ちゃんの治療が可能となりました。在胎37週未満、出生体重2,500g未満の早産、低出生体重児、更に未熟な超早産児や超低出生体重児のみならず、成熟児の呼吸障害、感染症も診療しています。先天性心疾患、染色体異常や多発奇形、小児外科疾患、形成外科、口腔外科疾患、脳神経外科疾患、耳鼻咽喉科疾患を有する児は、複数化科との連携を通して、最善の医療を提供可能です。新病院開院後は新生児循環器疾患の手術が可能となりました。

当院は新生児搬送専用救急車を有しており、地域の産婦人科医院、病院産婦人科におけるリスクの高い分娩への立ち会いや、病的新生児の搬送も24時間、365日体制で行っています。複雑心奇形で緊急処置が必要な場合には高次医療機関へのヘリコプター搬送も行っています。

NICU・GCUに入院した児は、人工呼吸器管理による無気肺、筋緊張のバランスの乱れ、哺乳嚥下障害などを合併する場合があります。当院ではNICU・GCUに理学療法士、作業療法士、言語聴覚士など新生児専門のリハビリテーション科職員を配置しており、赤ちゃん毎に、理学療法、作業療法、哺乳嚥下訓練などの適切なリハビリテーションを行い、疾病からの回復期がスムーズに進むようにサポートしています。

また、当院は、平成17年にBFH(赤ちゃんにやさしい病院)に認定され、母乳育児を通して(母乳育児困難な母親にも適切な支援を提供し)、安定した母児愛着形成を促し、『すこやかな赤ちゃんの発育発達』を最終目標に、出生前からずっと見守り、アドバイスをしてまいります。新生児心肺蘇生法(NCPR)講習会を定期的に行っており、新生児仮死を防ぐためにNCPRの地域への普及する拠点病院としての役割も担っています。